

構築主義意味論の功績と限界

渡邊 淳也・宮腰 駿

1. はじめに

本稿は、フランス語圏における発話言語学 (linguistique énonciative) の潮流のなかで構築された新たな意味論のわく組みである構築主義意味論 (sémantique constructiviste) を俎上にのせ、その功績と限界を検討するとともに、弱点となっている部分に関しては提案を提唱しようとするものである。

以下の論述は、つぎに示すような手順からなっている。まず2節で、構築主義意味論の功績として、指示主義・認知主義意味論との対比において、多義的・多機能的な記号素の研究における利点について確認する。そのあと3節で、構築主義意味論の極限例ともいべき語彙的記号素への適用について、おもに Péroz (2010) によるフランス語の名詞 *canard* の研究に即して批判的に検討する。最後に4節で、構築主義の接近法においてはほとんどかえりみられていない側面として、さまざまな表現や成句が歴史的・文化的な諸要因をとりこみながら成立してゆく過程を考慮に入れる必要性を指摘し、その過程をも図式化しうるような方途をさぐる。

2. 指示主義・認知主義意味論と構築主義意味論

構築主義意味論は、フランス語圏における発話言語学、とくに発話述定操作理論 (Théorie des Opérations Prédicatives et Énonciatives ; 略称 TOPE)¹ のなかで、指示主義意味論 (sémantique référentialiste) ならびに認知主義意味論 (sémantique cognitiviste) に対置するべく構築された新たな意味論のわく組みである。指示主義意味論や認知主義意味論は外界の指示対象 (の性質) にもとづいて意味をとらえる接近法であるのに対して、構築主義意味論は、言語表現を主体による操作の痕跡としてとらえるとともに、その操作の解明にもとづいて意味の構築をとらえる接近法である。構築主義 (constructiviste) という用語は、「[...] le sens des unités n'est pas donné mais se construit dans des énoncés. » (Franckel 2002, p.9) (語彙的単位の意味は与えられているのではなく、発話文において構築される) というテーゼから来ている。

以下では、テーマごとに指示主義・認知主義意味論の特徴を確認するとともに、構築主義意味論が対置する方途をみてゆこう。まず、フランス語圏の言語学における指示主義・認知主義意味論の旗手ともいべき Kleiber (1999, p.49) からの引用をみよう。

* この論文は、科学研究費 (JSPS Kakenhi) 基盤研究 (B) JP-18H00667 (研究代表者: 山村ひろみ)、同 (C) JP-20K00565 (研究代表者: 渡邊淳也)、ならびに同 (C) JP-22K00615 (研究代表者: 和田尚明) の助成をうけて遂行された研究の成果の一部である。議論に応じた Daniel Lebaud 先生に感謝申し上げたい。

¹ TOPE の概説については、たとえば Culioli (1990-2018)、Dufaye (2009)、La Mantia (2020)、青井 (1978, 1980)、青木 (1994)、宮腰 (2022) などを参照。

« la sémantique restant [...] affaire de compréhension, pour des termes comme *pomme*, *oie*, *chimpanzé*, *bicyclette*, *livre* et même *linguiste* [...], il est intuitivement préférable de concevoir le sens comme constitué de traits référentiels (traits du prototype ou conditions nécessaires et suffisantes), qui délimitent virtuellement leur référent. »

(意味論は理解の問題であるので、「りんご」、「がちょう」、「チンパンジー」、「自転車」、「本」のような辞項、そして「言語学者」さえも、それらの指示対象を潜勢的²に画定する、指示的な特徴(プロトタイプの特徴、あるいは必要十分条件)によって意味が構成されると構想するほうが、直観的にのぞましい。)

この引用からもわかるように、指示主義・認知主義意味論は、指示対象(の性質)を意味の実体として措定する傾向がある。

これに対し、構築主義意味論は、所与の言語表現に通底する意味の祖型を、図式的形態(*forme schématique*)と称して探求する。Franckel (2002, p.9)からの引用をみよう。

« La forme schématique (FS) représente l'identité d'une unité. Elle constitue le cadre d'un raisonnement permettant de dégager le rôle respectif de l'unité et de son cotexte dans la variation des sens qui peuvent lui être associés. » (図式的形態(略称FS)は語彙的単位の同一性を表象する。それは語彙的単位と、それにむすびつけられうる意味の変異における言語文脈のそれぞれの役割を抽出することを可能とする推論のわく組みをなす。)

つまりFSは、語彙的単位に固有の意味構造を明らかにするものでありながら、同時にその単位が用いられる言語文脈がどのように組織化されるかをも示すものでもある。もっといえば、Paillard (1998, p.18)のつぎの引用にみるように、FSは語と文脈との相互作用を問題とするものである。

« L'invariant est défini comme une forme schématique, cette dénomination soulignant l'interaction complexe entre le mot et le contexte : d'un côté le mot structure le contexte en tant qu'il correspond à un schéma, de l'autre, en tant que forme il reçoit sa substance du contexte. »

(不変性はFSによって示される。FSという呼称は、語と文脈の複雑な相互作用を強調するものである。一方では、語は図式をなすことによって文脈を構造化し、他方では形式として、文脈か

² この「潜勢的に」(*virtuellement*)という副詞は、Milner (1989, p.336)に規定されている「潜勢的指示」(*référence virtuelle*)の概念を下敷きにして用いられていると考えられる。「潜勢的指示」は「現勢的指示」(*référence actuelle*)と対をなす概念である。「現勢的指示」は具体的な指示対象を同定しうる指示であり、Milnerの例示では、「*la petite table*」のように限定辞や修飾語を帯びた名詞句全体ではじめて果たされる。それに対し、おなじくMilnerの例示では、名詞「*table*」単独でなしうる指示が「潜勢的指示」であり、それは例に即していうと、「*table*」を中心として形成される名詞句によってある指示対象が指示されるために具備すべき条件の総体である。

ら実質を受けとる。)

したがって FS は、関係する他の項目の布置にかならず留意して記述されることになる。なお、上記の引用には FS という命名の経緯もあらわれている。FS はその名のとおり、図式であるという側面と、形式である側面をあわせもっているのである。

たとえば、Franckel(1988,p.215)によると、副詞 *encore* の FS はつぎのように記述される。ここで P は *encore* が修飾する対象となる述語である。

« *Encore* construit une localisation de P relativement à l'extérieur de P, qu'il s'agisse d'une extériorité effective, d'ordre temporel, ou d'une extériorité envisagée, d'ordre notionnel. »

(*Encore* は、P の位置づけを P の外部とのかかわりにおいて構築する。その外部性は、時間的な次元での実際の外部性でも、概念的な次元での考慮された外部性でもありうる。)

この記述は、*encore* の継続の解釈も、反復の解釈も対象とすることのできるものである。継続の解釈とは、「Il est **encore** malade. » (ad loc.) (「彼は { まだ / また } 病気だ」) という文に即していうなら、「Il n'est pas **encore** guéri. » (ad loc.) (「彼はまだ治っていない」) と言いかえられる解釈である。反復の解釈とは、「Il est malade **une fois de plus**. » (ad loc.) (「彼はふたたび病気になった」) と言いかえられる解釈である。この多義性からもわかるように、副詞 *encore* はそれ自体としては渾然一体とした操作を標示しており、それが個別の発話文 (それは当然、具体的な文脈におかれているので、上記の « Il est **encore** malade. » のような両義性も解消される) のなかで用いられたときに、それぞれにことなる解釈を生むのである³。

つぎに、多義性 (polysémie) の問題について考えてみよう。指示主義・認知主義意味論では、ひとつの語がさまざまな意味側面 (facettes) をもっており、用法によってどの意味側面が活性化されるかがことなるという考えかたをすることがある。たとえば、livre 「本」という語を例とすると、全体としてまとまった意味をもちながらも、そのなかで、(1) では物理的な冊子 (volume) という意味側面、(2) では内容となるテキスト (texte) という意味側面が活性化されるとする。

(1) C'est un gros **livre** avec nombreuses illustrations en couleurs. (Kleiber 1999, p.87)

(それはカラー刷りの多くの図が入った分厚い本だ。)

(2) C'est un **livre** très dense, difficile à comprendre. (ad loc.)

(それはたいへん凝縮された、難解な本だ。)

³ « Itération et durée ne sont donc nullement des valeurs indépendantes de *encore*. Elles sont directement liées au mode de construction de la non-localisation de P. » (Franckel, ad loc.) (したがって、反復と継続はなんら、*encore* の独立した価値というわけではない。それらは P の非=位置づけの構築の態様と直接むすびついている。)

これらの意味側面は *livre* という語の意味に内在する要素のように考えられているので、意味側面による多義性への接近法は、原子主義的 (*atomiste*) であるといえる。原子主義的な接近法は、語を「意味の原子」のように考え、文法のみを操作的な要因であると考えを意味する。たとえば、Milner (1989) は、つぎのふたつの例を引き、

- (3) *Le silence éternel de ces espaces infinis m'effraie.* (Pascale, cité dans Milner 1989, p.286)
(この無限の空間の永遠の沈黙はわたしを畏怖させる)
- (4) *Le bavardage intermittent de nos petites sociétés me rassure.* (Valéry, cité dans Milner, ad loc.)
(われわれの狭い仲間うちでの一時のおしゃべりはわたしを安心させる)

(3) の文と (4) の反用 (*antiphrase*) とでことなる部分が意義 (*signification*) であり、語彙的次元 (*dimension lexicque*) であるのに対し、変わらない部分が統辞的次元 (*dimension syntaxique*) であるといっている。つまり、原子主義の最たる例であるといえる。

これに対し、構築主義意味論は、意味は発話文 (*énoncé*) 全体においてのみ発生してくるという、全体主義的 (*holiste*) な接近法をとる⁴。たとえば、動詞 *laisser* と *garder* は (5) においては類義語であるが、(6) においてはむしろ対義語である。つまり、これらの動詞が類義語であるか、対義語であるかはアプリアリにはさだまっておらず、個々の発話文全体においてそれぞれに意味が構築され则认为るのである。

- (5) *On préfère { laisser / garder } les volets fermés à cause de la chaleur.* (Jalenques 2009, p.41)
(暑いので、よろい戸を閉じたままにしておくほうがよい。)
- (6) *Pendant la visite de la base, vous devez { laisser / garder } vos papiers d'identité.* (ad loc.)
(基地の見学のあいだ、身分証明書を { 預け / 携帯し } なければならない。)

(5)、(6) のような例は、語彙や、それがもたらす意義をあたかも代入可能な定項のように考える「原子主義」に対する重要な反例になる。

これまでに概観してきた指示主義・認知主義意味論と構築主義意味論との対比は、つぎの表1のようにまとめることができる⁵。

⁴ « [...] nous considérons que les différentes significations intuitivement associées à une unité impliquent nécessairement la prise en compte de ses co-textes d'emplois (éventuellement implicites) et que ces significations ne sont pas indépendantes du sens global des énoncés dans lesquels l'unité apparaît. » (Jalenques 2009, p.41) (ひとつの語彙単位に直観的にむすびつけられるさまざまな意味は、(ときによっては暗黙の) 使用の言語文脈を考慮することを必然的に含意すると考える。また、それらの意義は、語彙単位が出現する発話文全体の意味から切りはなせないと考える。) つまり、「辞書レベルが意味論、文脈レベルが語用論」などという腑分けはここには存在しない。

⁵ 構築主義意味論の対比については、さらに伊藤 (2015) を参照。

表 1：指示主義・認知主義意味論と構築主義意味論

	指示主義・認知主義意味論	構築主義意味論
意味の実体	外界の指示対象 (の性質)	発話者による操作
記述の中心	プロトタイプ (prototype)	図式的形態 (forme schématique)
多義性の発生	意味側面 (facettes) の選択と活性化	言語形式と文脈の変異の相互作用

3. 構築主義意味論による語彙的記号素の研究

構築主義意味論は、操作を記述するという性質上、副詞、前置詞、連結辞、談話標識、動詞、叙法、時制などの機能的記号素 (monèmes fonctionnels) ないし文法的記号素 (monèmes grammaticaux) を研究対象とすることが多かった⁶。これに対して、語彙的記号素 (monèmes lexicaux) は一見構築主義が適用しづらいものである⁷。語彙的記号素が明確に構築主義意味論によって探求されはじめたのは、Franckel et Lebaud (1992) による名詞 lit の研究からである。ここでは分析の内容には立ち入らないが、名詞を意味の原子のように考えるのではなく、他の辞項との関係を規定する機能を想定する分析に特徴がある⁸。

以下では、TOPE による構築主義意味論の立場を徹底させた Péroz (2010) による名詞 canard の研究を検討したい。

まず、名詞 canard の意味のひろがりをおおきくするために、『新スタンダード仏和辞典』第3版 (1989 年) による canard の記述 (ibidem, p.250) を以下に引用しておく。

canard [kanar] n.m. 1. [鳥] 鴨 (= ~ sauvage) 『真鴨・おしどりなどの水鳥の総称。雌は cane』. ~colvert 真鴨. ~pilet 尾長鴨. ~mandarin おしどり. chasse aux ~s 鴨猟. froid de ~ 『話』 (鴨猟の季節のような) ひどい寒さ. 2. あひる (= ~ domestique) ; 『特に』雄のあひる (鴨) (=malard). mon petit ~ 『話』かわいい人『愛称』. ◆ [料理] ~ laqué 北京ダック. ~ à l'orange 鴨のオレンジソース蒸し. ◆ 『成句』 ~ boiteux 集団から落ちこぼれる人 ; 業績不振の企業. Il n'a pas cassé trois pattes à un ~. 『話』彼は大きなことをしたわけではない. marcher comm un ~ 尻を振り振りよたよた歩く. mouillé (trempé) comme un ~ 『話』びしょ濡れになった. 3. (コーヒー、リキュールなどに浸した) 角砂糖. 4. 『話』 (歌手・管楽器の) 調子はずれの声 (音). 5. 『話』 (新聞などの流す) デマ, 虚報. 6. 『話/しばしば蔑』 (三文) 新聞, 赤新聞 ; 『古』かわら版. Le C ~ enchainé 「カナール・アンシェネ」 『政治風刺新聞』. 7. (病人用の) 吸い飲み.

⁶ たとえば、動詞に関しては Camus et de Vogüé (dir) (2004)、Franckel et Lebaud (1990)、副詞や時制形式などに関しては Franckel (1988)、前置詞に関しては Franckel et Paillard (2007)、Ashino et al. (2017)、文副詞、談話標識に関しては Paillard, D. (1998)、Paillard et alii (2012)、Paillard (dir) (2017)、Paillard (2021)、宮腰 (2022, 2023 a, 2023 b)、返答辞 ouais については Péroz (2009) を参照。

⁷ 機能的記号素、文法的記号素、語彙的記号素という用語は Martinet (1991, pp.111-112 et 118) によるものである。

⁸ 渡邊 (2015) (2018) でも論じたように、フランス語の名詞は関係的・操作的に規定できるものが多い。事例研究としては、さらに渡邊・ルポー (2017) でなされた名詞・形容詞 sujet に関する考察を参照されたい。

以上のような辞書の記述からも知ることができるように、*canard* は、語彙的記号素のなかでも関係的なとらえかたが特に困難な事例であるが、Péroz は理論の試金石としてあえて困難な事例を研究対象にする「賭け」(pari) に出ることを宣言している (ibidem, p.104)。基本的な考えかたは、être *canard* (*canard* であること) の生起 (occurrence) が発話文において構築されるのであり、その構築を説明するべきであるというものである。下記は Péroz からの引用である。

« Construction signifie que pour une occurrence donnée de *canard* le rapport de la propriété ‘être *canard*’ au terme qui lui donne un support ne va pas de soi. » (Péroz 2010, p.104)

(「構築」が意味するのは、*canard* のある生起に関して、「*canard* であること」という性質と、その性質を受けとめる辞項との関係が自明ではないということである。)

être *canard* という特性が付与されるのが X である。X は、言語的にとらえられた限りのものであり、外界に指示対象として存在するとは保証されない。そして、*canard* の意味的な諸変異が発生するメカニズムを、文脈における X の具現化 (instanciation) と、X に関して認められる特徴 p の布置 (configuration) によって説明しようとしている。

X の具現化とは、どのように X の生起が立ちあらわれるかという問題であり、離散 (discret)、稠密 (dense)、集密 (compact) の 3 種類がある。離散の場合は、« Les X qui sont des *canards* » (ibidem, p.107) (いくつかの *canards* である X) という註釈がつけられており、可算の *canards* と関連づけられる場合である。鳥のカモ、アヒル、酒類にひたした角砂糖、そして新聞をさす場合がこれにあたる。稠密の場合は、« Les X qui « se trouvent » être des *canards* » (ibidem, p.106) (たまたま *canards* でありうる X) と註釈され、通常は *canard* であることが期待されない X に être *canard* という特性が付与される事例である。その際の具現化は時間的・空間的になされる。*canard* が「調子外れの歌唱」をさすときや、「チームの足をひっぱるメンバー」をさすときがこれにあたる。そして、集密の場合は、« Les X que l’énonciateur appelle « *canards* » » (ad loc.) (発話者が *canard* と名づける X) と註釈され、主体・主観に依存した名づけによって具現化がなされる事例である。たとえば、愛称の « mon petit **canard** » (わたしのかわいいアヒルちゃん) や、誤報に関していわれる « Ce n’est qu’un **canard** » (ガセネタにすぎない) などの例がある。

つぎに布置は、X を規定する特徴 p がどのような配置であらわれるかという問題であり、こちらにも 3 通りがある。第 1 は p と non-p のあいだの他者性 (altérité) がある場合で、たとえば調子外れの歌を *canard* というとき、音階の正しさ (p) が期待される場所、実際は正しくない (non-p) ののである。第 2 は p と p' (p 以外) の他者性がある場合で、たとえば極度の寒さを « un froid de **canard** » という場合、その寒さの度合いが期待とかけ離れている (p')。第 3 は p_i と p_j の他者性、すなわち類的には同じ p ではあるがそれがくり返される場合であり、同じ鳴き声をくり返す動物 (« l’animal qui répète le même cri », ibidem, p.109) のアヒルをさす場合がこれにあたるという。

これまでに見てきた変異をまとめると、つぎの表2のようになる。

表2：canard における具現化と布置 (Péroz 2020, p.109, 日本語部分を追記)

布 置 (configuration)	具 現 化 (instanciation)		
	稠 密 (dense)	離 散 (discret)	集 密 (compact)
(p, non-p) の他者性	調子外れの歌唱 (couac musical)	砂糖 (sucre)	誤報 (fausse nouvelle)
(pi, pj) の他者性		アヒル (canard domestique)	
(p, p') の他者性	不器用な歩き方 (canard boiteux) 極度の寒さ (froid de canard)	新聞 (journal)	愛称 (mon petit canard)

そして canard の FS は、つぎのように記述される。

« Si X vérifie normalement p, sa construction comme *canard* s’accompagne de l’actualisation de autre-que-p. » (ibidem, p.110)

(X が通常 p を満たすなら、X が canard として構築されることには、p 以外のものの実現が伴う。)

この FS には、ただちに気づく問題点がある。アヒル・カモをさす基本的な語義においては、autre-que-p というより p の内部での他者性 (同じ鳴き声) が問題になっている点で、この FS は Péroz 自身の記述と矛盾する。くわえて、くり返し同じ鳴き声をあげる動物は多く、この記述はほかの動物にもあてはまってしまう。しかし、動物としての canard のもつ他者性には、実はもうひとつの要因がある。それは、アヒル・カモは歩き、泳ぎ、飛ぶことができる点で混成的 («hybride», ibidem, p.112) な動物であることで、そこにも (p, p' 型の) 他者性をみることができる⁹。この点で、実は pi、pj 型の他者性という分類は解消したほうがよいかもしれない。

ただ、そう考えてもなお、この FS は canard に限らず、少しでも越境的な性質があれば、なんにでも適用できてしまうと思われる。たとえば、両生類にも適用できる。

また、第1の批判点は、直前に指摘した pi、pj の他者性という分類をたてることへの疑義の延長であるが、比較的単純な FS に対し、その変異の可能性を示そうとするあまり、具現化と布置による多数の分類をたてることへの疑義がある。上記の pi、pj は布置の問題であったが、具現化に関しても、なぜそれが離散、稠密、集密というトポロジー的な分類によらなければならないのか、その根拠はよく示されていない。

⁹ この混成性は、多くの場合マイナス評価の源泉になっていると思われる。もとより、canard にふくまれる -ard という接尾辞は軽蔑辞 (péjoratif) であり、この語にはマイナス評価が書きこまれているということもできる。平行的に、Péroz による FS は、マイナス評価の対象となる逸脱 (transgression) を記述していると解釈することもできよう。

4. 構築主義意味論のさらなる限界と代案

Péroz の図式化にはほかにも問題がある。以下、さらに指摘してみたい。

第 1 に、いくつかの用法について、Péroz 自身が隠喩性を認めていることを指摘したい。ここでいう隠喩 (métaphore) とは、より基本的でたいてい具象的な用法から、派生的で抽象的な用法への転義であると認められる現象のことである。角砂糖を canard と呼ぶことに関して、Péroz (2010, p.109) から引用する。

« C'est un sucre que l'on fait plonger dans le café **ainsi que le font les canards, comme les canards ressortent de l'eau**, on sort ensuite le sucre pour le déguster. » (強調引用者)

(それは、あたかもアヒルがもぐるように、コーヒーにくぐらせる砂糖である。アヒルが水から出てくるように、そのあと砂糖をコーヒーからとりだして味わうのである。)

また、チームの足をひっぱる成員をさす用法に関しては、つぎのように言っている。

« X non seulement se dandine (soit p) **comme on pourrait s'y attendre pour un canard** mais il fait plus que cela : il boite (soit autre-que-p) » (ibidem, p.108 ; 強調引用者)

(X はアヒルに関してひとが予想するように身体をゆすって歩く (これを p としよう) だけでなく、それ以上のことをする。跛行しているのだ (これを p 以外としよう)。)

しかしこれらは、canard のもっとも安定した解釈である、動物としてのアヒル、カモの意味を基本とする考えかたであり、当の Péroz (2010, p.101) が批判していた指示主義的な接近法そのものである。

第 2 に、第 1 の問題ともかかわるが、隠喩や成句が歴史的・文化的な背景を背負うことによってこそ意味をなすに至っているという点が捨象されてしまうという問題がある。たとえば、un froid de canard (極度の寒さ) という成句は、一説には、« un temps propice à la chasse aux canards » (ibidem, p.113) (カモ猟に適した気候)¹⁰ をさすという経緯を下敷きにした表現であるにもかかわらず、単に「寒さの度合いが期待とかけ離れている (p')」という記述へと過度に単純化されている。また、直前でふれた角砂糖の例は、Péroz 自身が思わず認めてしまっているように、「あたかもアヒルやカモが水上を泳いだり水中にもぐったりするように、角砂糖をコーヒーのなかにくぐらせる」という視覚的類似性にもとづいた隠喩であるが、これを Péroz は、« il devrait fondre, mais comme on l'a alcoolisé, il ne fond pas » (溶けてもおかしくないが、アルコールにひたしているので、角砂糖は溶けない)¹¹ という、p、non-p の他者性の標示へと還元してしまっている (ibidem,

¹⁰ よりくわしくいうと、越冬のため北方からフランスに飛来しているカモが多いことから、厳冬がカモ猟にもっとも適した季節であるということになる。

¹¹ ただし、canard とよばれる角砂糖は、かならずしもアルコールを帯びているとはかぎらない (子どもにも食べさせる)。その意味でもこの記述は ad hoc である。

p.109)。

隠喩全般の問題としてもうひとつ例を出すと、ときおり un froid de canard と同様に単なる「強調」とされる、「Il pleut des cordes. » (大雨が降っている) という表現も、「綱が降っている」という字義から出発して、絶え間なく降る雨を綱にたとえるという、歴史的・文化的に成立してきた表象間の紐帯をふまえてこそ理解できるものである。Péroz 自身も結論で引用している (ibidem, p.111) が、Culioli (1990, p.102) がいうように、「il n'y a pas de marqueur sans la trace mémorisée de sa genèse » (創成の記憶をとどめる痕跡のないマーカーはない) のである。

名詞 canard にもどると、隠喩や成句が意味をなす基盤になる語義は、いずれも、もっとも基本的で安定していると思われるカモやアヒルの語義である。このため、隠喩や成句に関しては、FS から直接的に語義を与えるのではなく、2 段階での意義の形成を考えるほうがよいと考える。隠喩・成句は、いわば「第 2 度の使用」(emplois du second degré) であり、いったんアヒルの意義に到達したことをふまえたうえで、さらなる意味派生を経ていると考えるのである。しかしそのように考えると、結局は認知主義意味論のように、アヒルという基本的語義を中心とする放射状のカテゴリーとしてすべてを理解する試みになるおそれがある。つまり、canard に関しては、砂糖も新聞も調子外れの歌唱も第 2 度の使用になってしまい、結局は構築主義を放棄することになりかねない。

ではどうするか。つぎの図 1 にみるように、隠喩的紐帯によってあらたな語義を生んできた通時的連関 (図中の破線矢印で示される) と、FS からそれぞれの用法における語義を形成する共時的連関 (図中の実線矢印で示される) を区別することを提案したい。

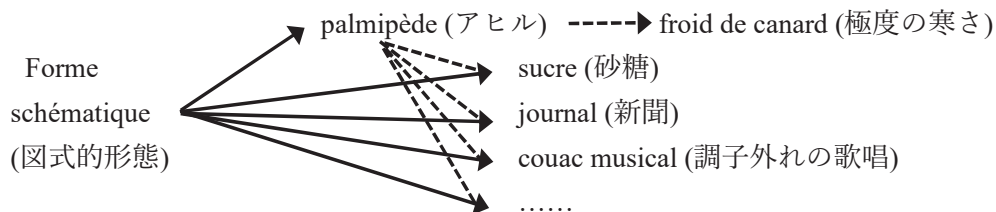


図 1: 2 段階の意義形成

canard の場合は、アヒルやカモ以外の語義に、こんなにちでもなお隠喩的紐帯が感じられやすいものが比較的多い。砂糖の語義は「あたかもアヒルやカモが水中にもぐるように、角砂糖をコーヒーのなかにくぐらせる」ことからきている。調子外れの歌唱の語義はアヒルのなき声から、チームの進行を遅らせる成員の語義はアヒルの歩き方からきている。

しかしこのような通時的連関のなかには、もはや紐帯が忘却されている場合もある。誤報や新聞の語義は、おそらくは « bailler un canard à moitié » (「半分アヒルを与える」⇒「あざむく」) という 16 世紀の成句に由来すると推測されており (Cabard 2022, p.109)、そこから誤報、そして低俗な新聞といった語義につながったものと考えられる。この語

義に関してはもはや隠喩的紐帯が感じられない死喩 (métaphore morte) になっている¹²。死喩はもはや直観的にあとづけることができないが、共時的には FS からの派生としてとらえかえすことができる。

構築主義意味論でいう「構築」(construction) にはさまざまな性質があり、毎回の使用に依存するものもある一方で、ある程度安定的なものもある。安定的な構築が形成する中間到達点をふまえて、使用依存的なさらなる派生を展望するのが本稿の２段階的な考えかたである。通時的連関は中間的到達点からの派生でありうるが、共時的連関は現存するすべての意味や解釈を問題とするため、FS を本源においた全体的な構図を形成するのである。

ところで図 1 をみると、froid de canard 以外の部分は、Langacker (1988, p.140) による用法基盤モデルにおける図式化 (図 2) と類似しているように思われるかもしれない。ここでは、スキーマ (schema) とは諸事例から抽象される共通点であり、これを背景として、あるカテゴリーに属するプロトタイプ (prototype) から拡張事例 (extension) への拡張 (図中の破線矢印で示される) が可能になる。一方、スキーマからみれば、諸事例は具現化 (instanciation、図中では実線矢印で示される) を経たものである。

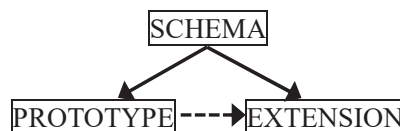


図 2：用法基盤モデル (Langacker 1988, p.140)

canard の場合に即していうと、アヒルやカモの語義が Langacker の図式におけるプロトタイプであり、砂糖、新聞などの語義が拡張事例であると見なすこともできる。しかし Langacker の図式化は、通時的連関、共時的連関を区別して示そうとする考えかたではない。また、Langacker のいうスキーマと、構築主義意味論における FS では、基本的な性質がことなる。スキーマは諸事例のあいだの比較によって抽出される共通点であり、(知識の拡大や考慮する範囲に応じて変化するという点では動的であるが、) それ自体は物-in-the-world 的な辞項でもありうる¹³ のに対し、FS はつねに操作的な、文脈的要素をふくみ込んだ構築的かつ動的な図式化であり、語彙的記号素についても、あえて、文脈上の他の項目とのかかわりを示す関係的辞項 (terme relationnel, Péroz 2010, p.104) としてとらえようすることに眼目がある。

¹² 死喩の概念については、さらに Landheer (2002) を参照されたい。

¹³ Langacker (2008, p.224-226) から例を引くと、[MAIL] と表記される従来の紙媒体の書簡 (hard mail) がプロトタイプで、そこから [EMAIL] と表記される電子メールへの拡張がなされた結果、[MAIL] と表記されるスキーマが抽出される。このスキーマは紙媒体と電子メールの両方をおおう。[MAIL] レヴェルで用いられる mail の例として、つぎの対話があげられている。

A: I got a lot of **mail** this morning. B: Email or hard mail? (ibidem, p.225)

5. おわりに

以上、本稿では、構築主義意味論の功績と限界を検討するとともに、弱点となっている語彙的記号素の隠喩的用法に関しては代案を提唱した。図1で示した本稿の考えかたは折衷的なものであり、canard においても、動物としてのカモ、アヒルの語義は、意味構築における中間到達点として安定した解釈を示している一方で、その根柢にはやはり FS が存在する、というものである。もちろんその FS は、Péroz が示したままでよいかという点はなお検討が必要であるが、構築主義意味論は全体として意味論の目的に再考をせまる立場であるといえる。canard に即していえば、canard の指示対象が何かと問うのではなく、canard という語がどのように使われているかを集中的に問うことが、(博物学徒ではない)言語学徒のしごとである¹⁴。記述のうえでも、canard の指示対象は鳥類であつたり、人間であつたり、角砂糖であつたり、新聞・雑誌であつたり、歌唱や歩行のしかたであるなど、非常に多様であるため、実は外界の指示対象(の性質)に依拠した記述もけっして容易ではない。そのこととの比較においては、Péroz (2010, p.104) が「賭け」(pari) と称していた構築主義による記述も、かならずしも不当に困難な方途ではない。構築主義は指示主義・認知主義とは一線を画して、外界の指示対象(の性質)を出発点とはしない意味記述をめざす試みであり、「賭け」をする価値のある接近法であると考える¹⁵。

参考文献

- 青井明 (1978): 「アントワヌ・キュリオリの言語理論」『フランス語学研究』12, pp.87-97.
青井明 (1980): 「キュリオリの言語理論・補遺」『フランス語学研究』14, pp.92-101.
青木三郎 (1994): 「アントワヌ・キュリオリの発話理論」『フランス語学研究』28, pp.61-66.
伊藤達也 (2015): 「語彙意味論に適する『相互依存的』構成性について」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』48, pp.135-143.
Ashino, F. et al. (2017): *Prépositions et rection verbale*, Peter Lang.
Cabard, P. (1995 / 2022): *L'Étymologie des noms d'oiseaux*, Delachaux et Niestlé.
Camus, R. et S. de Vogüé (dir) (2004): *Variation sémantique et syntaxique des unités lexicales : étude de six verbes français*, Linx, 50.
Culioli, A. (1990-2018): *Pour une linguistique de l'énonciation*, 4 volumes, Ophrys / Lambert-Lucas.
Dufaye, L. (2009): *Théorie des opérations énonciatives et modélisation*, Ophrys.
Franckel, J.-J. (1988): *Étude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Droz.
Franckel, J.-J. (2002): « Introduction », *Langue française*, 133, pp.3-15.
Franckel, J.-J. et D. Lebaud (1990): *Les figures du sujet : à propos des verbes de perception, sentiment, connaissance*, Ophrys.
Franckel, J.-J. et D. Lebaud (1992): « Lexique et opérations. Le lit de l'arbitraire », *La théorie d'Antoine*

¹⁴ 渡邊・ルボー (2017) でも、sujet という語を問題にする際、「考察したいのは、科学的、哲学的な概念化からは独立した、sujet という語彙単位の使用についてであり、その機能についてである」(ibidem, p.3) という方針によった。

¹⁵ 名詞 créneau を対象とする類似の事例研究については、さらに Watanabe (2023) を参照。

- Culioli, Ophrys, pp.89-106.
- Franckel, J.-J. et D. Paillard (2007) : *Grammaire des prépositions*, 1, Ophrys.
- Jalenques, P. (2009) : « La synonymie en question dans le cadre d'une sémantique constructiviste », *Pratiques*, 141/142, pp.39-64.
- Kleiber, G. (1999) : *Problèmes de sémantique : la polysémie en questions*, Presses Universitaires du Septentrion.
- La Mantina, Fr. (2020) : *Pour se faire langage. Lexique élémentaire de la théorie des opérations prédicatives et énonciatives d'Antoine Culioli*, L'Harmattan.
- Landheer, R. (2002) : « La métaphore, une question de vie ou de mort ? », *Semen*, 15, pp.25-39.
- Langacker, R. W. (1988) : « A Usage-Based Model », B. Rudzka-Ostyn (Ed.) : *Topics in Cognitive Linguistics*, John Benjamins, pp.127-161.
- Langacker, R. W. (2008) : *Cognitive Grammar : A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- Martinet, A. (1961 / 1991) : *Éléments de linguistique générale*, Armand Colin.
- Milner, J.-Cl. (1989) : *Introduction aux sciences du langage*, Seuil.
- 宮腰駿 (2022) : 「発話理論にもとづく談話標識研究について —Ranger(2018) の論評—」『発話言語学研究』 1, pp.91-100.
- 宮腰駿 (2023 a) : 「副詞 *personnellement* と前置詞句 *en personne* の意味構造に関する一考察」『フランス語学研究』 57, pp.1-20.
- 宮腰駿 (2023 b) : 「フランス語における文頭位置の *-ment* 副詞に関する一考察」『ロマンス語研究』 56, pp.47-62.
- Paillard, D. et alii (2012) : *Inventaire raisonné des marqueurs discursifs du français : Description-Comparaison-Didactique*, Editions Université Nationale de Hanoi.
- Paillard, D. (1998) : « Les mots du discours comme mots de la langue », *Le Gré des Langues*, 14, pp.10-41.
- Paillard, D. (dir) (2017) : *Comparaison des marqueurs discursifs*, *Langages*, 207.
- Paillard, D. (2021) : *Grammaire discursive du français : Étude des marqueurs discursifs en -ment*, Peter Lang.
- Péroz, P. (2009) : « On ne dit pas *Ouais* ! Usages sociaux, variation sémantique et régularité des opérations linguistiques », *Langue française*, 161, p. 99-111.
- Péroz, P. (2010) : « Régularité des opérations linguistiques dans la construction du sens », *Travaux de linguistique*, 61, pp.97-114.
- 渡邊淳也 (2015) : 「Essuie-tout の意味論」『外国語教育論集』 筑波大学, 37, pp.75-88.
- 渡邊淳也 (2018) : 「フランス語の語彙の操作性とアフォーダンス」『ロマンス語研究』 51, pp.1-10.
- Watanabe, J. (2023) : « Sémantique constructiviste et locutions métaphoriques », *Études de linguistique énonciative*, 2, pp.28-35.
- 渡邊淳也、ダニエル・ルポー (2017) : 「フランス語の *sujet* および対応する日本語の研究」青木三郎 (編) 『フランス語学の最前線』 5, ひつじ書房, pp.1-29.

(最終原稿受理日 2024 年 4 月 20 日)

(わたなべ じゅんや / 東京大学)

(みやこし しゅん / 東京大学大学院)

統一テーマ「ロマンス諸語における意味論」

山村 ひろみ（とりまとめ）

1. はじめに

日本ロマンス語学会の大会は、2020 年、2021 年、2022 年とコロナ禍のため中止あるいはオンラインによる開催を強いられてきたが、2023 年の第 61 回大会は晴れて対面とオンラインのハイフレックス方式により 5 月 13 日（土）および 14 日（日）、2020 年度予定されていた明治学院大学白金キャンパスで開催された。発表は統一テーマ 4 件、自由テーマ 7 件であった。ここでは本大会の統一テーマは「ロマンス諸語における意味論」の発表（持ち時間 20 分）および総合討議でのディスカッションを振り返る。総合討議はすべての発表の後に行われたが、ここでは各発表の要旨の後に、総合討議で交わされた質疑応答、コメントの内容を記す。なお、発表者の敬称は略す。また、以下の発表のうち、蔦原、川瀬、渡邊・宮腰の発表は論文として本号に掲載されている。

2. 研究発表と総合討議

(1) 蔦原亮「de manera/forma/modo その定型性と異同 意味と共起語に着目して」

「方法」「やり方」といった意味を表すスペイン語の *manera*, *forma*, *modo* は、前置詞 *de* を伴い *de manera/forma/modo* で用いられると必ず形容詞などの修飾語を伴い、*-mente* 副詞と同義になる。この “*de manera/forma/modo*+修飾語” の語連結について、先行研究では、英語の *-ly*、スペイン語の *-mente* に相当する定型表現と見なすものがある一方で、同連結の前置詞 *de* と「方法」「やり方」を意味する名詞の間には冠詞などが挿入可能であること、また、当該名詞は複数形にすることも可能であることを根拠に自由連結とする見方もある。そこで本研究は、“*de manera/forma/modo*+修飾語” は定型表現か否か、もし定型表現だとしたらそれはどのような性質のものか、また、同連結の機能はその名詞に拘わらず等価か否かを、European Spanish Web (2011), CORPES XXI [en línea] を用いて考察した。その結果、① “*de manera/forma/modo*” と裸 *manera/forma/modo* では修飾する語句に明らかな違いが見られること、② *de manera/de forma* は極めて使用頻度の高い連結であること、③ *manera/forma/modo* が *de* の補語になる率はそれらが裸で出現する率よりも高いことから、“*de manera/forma/modo*” は Zulaga (1992) のいう *unidad fraseológica con casillas libres* (空欄のある定型表現) とした。次に、*de manera/de forma/de modo* それぞれと共起する特徴的な語を調べ、*de manera* と *de forma* については共起語の差はほとんどなく当該名詞は脱意味化しているようだが、*de modo* の *modo* には本来の意味が残っているように見えること、さらに、CORPES XXI の観察によると、スペインでは *de forma* が、中南米諸国では *de manera* が好んで使用される傾向があることを示した。

[総合討議]

1. 質問：*manera*, *modo* を意味的に考えると「何の *manera* か (*manera de* ...)」と「どう

いう manera か (de manera …)」という二つの側面があり、それぞれに de manera と裸の manera にあたるパターンがあるとするならば、de manera の方が裸の manera よりも manera の意味が希薄化（語彙化）しているということは意味しないという考え方も十分成り立つのではないか。つまり、manera 自体は変わっておらず、2つの側面のそれぞれが現れている2つのパターンがあるだけということだが、このような見方についてどう思うだろうか。

回答：もしそのような見方が有効であるなら、発表で提示した *Estudia español de manera de estudiar inglés* がなぜ容認されにくいのかという説明が難しくなるように思われる。

2. 質問：de manera que については de manera と同じように扱えるのか。

回答：de manera que については2つある。ひとつは「したがって」という意味の接続詞として機能する de manera que で、これは語彙化の例と考える。もう一つは「que …のような方法」という場合で、これは que 以下が manera の修飾部となっているという点で、de manera と同じように扱えると考ええる。

3. 質問：発表者の *unidad fraseológicas con casillas libres* 「空欄のある定型表現」の捉え方は引用された Zulaga (1992)のそれとは異なっているように見える。Zulaga (1992)の「空欄のある定型表現」は空欄を埋めることは必須だが何を埋めるかは自由という解釈のように見えるが、発表者の提案は空欄を埋めるか否かさえ自由のように見える。両者の間に齟齬はないか。

回答：Zulaga (1992)の「空欄のある定型表現」の本質は埋めなければいけない候補が複数あるということで、何も入れないというのも含めて候補になっているのではないかと考える。

4. 質問：ハンドアウトに「de manera 内の manera は de と共に語彙化しており」とあるが、この「語彙化」という用語はどのように解釈されているのか。

回答：「語彙化」という用語にはいろいろな解釈があるが、本発表では、複数の語のまとまりの間の区切りがなくなり一語化したものを指し、de manera の文法化と矛盾するものではない。

5. 質問：de manera は「空欄のある定型表現」ということだが、そこに設定されたスロット（空欄）はどのような位置づけの構造なのだろうか。というのも、その空欄には当該名詞に前置される限定詞、当該名詞に後置される形容詞というように様々な要素が入るからである。

回答：確かに、空欄の性質は様々であり、必ず埋める必要のある空欄もあれば、そうでない空欄もある。今のところ、de と manera の間が空欄の de manera と両者の間に限定詞等が入る de * manera は区別すべきではないかと考えている。de * manera は自由連結と解釈されることもできるからである。

- (2) 森一平「フランス語の半過去形と語調緩和－一時制の諸形式間の差異に基づく分析－」

フランス語の半過去には丁寧な要求を表現するために用いられる語調緩和という用法があるが、この用法は他の動詞形式にも存在する。そこで、本発表は、他の動詞形式によって表される語調緩和用法が存在するなかで半過去の語調緩和がどのような立ち位置を得ているのかを明らかにしようとした。まず、語調緩和の半過去を扱った先行研究を概観しながら、その仕組みには時制的解釈とモダールの解釈、さらには、そのいずれでもない解釈があることを示し、様々な動詞形式によって表される語調緩和用法を説明するには各形式の特性に基づく必要があることを確認した。次に、フランス語の話言葉コーパス ESLO を用いて *je voulais/je voudrais* に後続する共通の不定詞が示された後、これまで文法書や先行研究で曖昧に使用されてきた「語調緩和」という概念の整理・分類が行われ、語調緩和という名前で一括りにされてきた6つの動詞形式（半過去形、大過去形、単純未来形、前未来形、条件法現在形、条件法過去形）の階層性のモデルが提示された。それによれば、語調緩和は「丁寧さの度合い（高いか低いか）」、「聞き手への訴えの仕方（要求か命令か）」、「語調緩和の対象者（聞き手か話し手か）」によって階層化されるが、本発表のテーマである語調緩和の半過去形は、他の動詞形式による語調緩和用法と同じく話し手寄りの語調緩和を持つ一方で、聞き手への丁寧な要求を行うものであることが示された。

[総合討議]

1. 質問：ハンドアウトに前未来形の語調緩和用法は日本語で記述されたフランス語の文法書にしか記述されていないとあるが、これはフランス語母語話者には前未来形は語調緩和に聞こえないことを示唆するのではないか。

回答：日本語母語話者から見ると語調緩和に思われる前未来形の用法をフランス語母語話者は別の用法と捉えているのかもしれない。

2. 質問：結論として語調緩和の「階層モデル」が提案された。この階層モデルは4つの階層に分かれているが、上の3層は聞き手目当てなのに対し、最も下にある階層だけは話し手目当てになっている。話し手目当ての「語調緩和」というのはいささか不自然であり、また、提示された例文を見ると、「語調緩和」というよりむしろ内容の確言を弱める命題目当てのモダリティと解釈される。そのように考えるならば、提案された4つの階層のうち上の3つは聞き手目当てのモダリティ、一番下は命題目当てのモダリティというように区別されることになり、両者を同じように扱うのは難しくなるように思われるが、どのように考えるか。

回答：確かに、階層モデルの上の3層といちばん下の層の間には指摘されたような違いがあると思う。今後そのようなモダリティの違いも考慮に入れながら考察を深めたいと思う。

- (3) 川瀬瑛美「翻訳テキストの比較からみた、ルーマニア語とフランス語の間接話法における時制の一致」

本発表は、ルーマニア語の時制の一致の実態を時制の一致がほとんど義務的なフラン

ス語と対照とさせることにより明らかにすることを旨としたものである。フランス文学のルーマニア語訳とフランス語原文から過去に置かれた間接話法を集めるという手法を用いながら、次の結果を得た。過去に置かれた間接話法において、①従属節が主節に対して後続を表す時制では形態的な理由から時制の一致をしないことが多い、②従属節が主節に対して先行を表す時制では大過去、複合過去それぞれが持つ時制的価値により一致ありとなしの選択がなされる、③従属節が主節と同時を表す時制では、それが Berthonneau et Kleiber (1997)のいう「臨時の状況」を示すものであれば半過去、「安定した特性、特徴」を示すものであれば現在形が用いられる。特に、③については、フランス語の半過去が持つ「全体を特徴づける機能」がルーマニア語の半過去にはないという、その半過去の機能に求められる。これらの結果から、「主節の時制に合わせて従属節の時制が決まる」という時制の一致の現象が最もよく当てはまるのは大過去であり、その他の時制では個別の事情が関与しているといえる。したがって、ルーマニア語の時制の一致の全体像を捉えるためには、各時制の機能や性質の考察と各時制相互の作用の研究が必要である。

[総合討議]

1. 質問：ハンドアウトに「ルーマニア語の半過去には、「全体を特徴づける機能」がないように思われる」(p.8)とあるが同ページの例文 (Remarcasem[大過] că toate irlandezele beau[現] așa ceva, dar eu nu eram[半過] irlandeză. 「アイルランド女性みんなこんなものを飲むことに私はすでに気が付いていた。しかし、私はアイルランド人ではなかった」) の従属節中のルーマニア語の beau [現]は半過去と形式が同じである。この形式を現在形と解釈したのはなぜか。もしこの形式を半過去と取ると、この例文は上述の「ルーマニア語の半過去には、「全体を特徴づける機能」がないように思われる」ということの反例になる。また、それに後続する接続詞 dar (but)から始まる半過去の文 (dar eu nu eram irlandeză 「しかし私はアイルランド人ではなかった」)はどのように解釈されるのだろうか。

回答：まず、例文の beau を現在形と判断したのは、文脈を踏まえた解釈からである。次に、それに続く接続詞 dar から始まる文の半過去は従属節ではなく独立文に出現したものとする。Zafiu (2013)は、間接話法に見られるような従属節の半過去について「発話時にはもう存在しない事実」を表すと述べ、それは本発表の調査でも確認された。しかし、当該例文の後続の文のように、物語の地の文の独立文に出現した半過去が「全体を特徴づける機能」を示している場合、その半過去をどのように捉えるかは今後の課題である。

コメント：当該例文から前文を取り除き、いきなり半過去で始まる文 (Dar eu nu eram[半過] irlandeză.) になるとそれは大変不自然なものとなる。それを踏まえるならば、独立文のように見えるこの後続文にも前文の文脈が何らかの関与をしているのではないか。そうすると、この地の文の独立文に出現した半過去も間接話法の従属節に出現した半過去と一緒に考える必要があると思われる。

(4) 渡邊淳也・宮腰駿「構築主義意味論の功績と限界」

本発表は、フランス語圏における発話言語学(linguistique énonciative)の中で構想された新たな意味論の枠組みである構築主義意味論(sémantique constructiviste)を、従来の指示主義意味論また認知主義意味論と比較しながらその功績と限界を示すと同時に、その限界を克服するための代案を提唱しようとしたものである。まず、構築主義意味論は、指示主義・認知主義意味論が外界の指示対象の性質を意味の実体として捉えるのに対し、構築主義意味論は言語表現を主体による操作の痕跡として捉えた上で、その意味の祖型を図式的形態(forme schématique, FS) と呼び、それは語と文脈の相互作用を問題とするものであることを示した。次に、多義性について、指示主義・認知主義意味論は、一語が持つ様々な意味側面のどの側面がどの用法によって活性化するかといった意味の原子主義的接近法を取るのに対し、構築主義意味論は、意味は発話文全体においてのみ発生するという考えから全体主義的接近法を取ることが示された。さらに、構築主義意味論の語彙的記号素の応用として Péroz (2010)を取り上げ、それが提案した canard の FS にはその変異の可能性を示そうとするあまり何にでも適用されてしまう弊害があること、また、隠喩や成句といった歴史的・文化的背景を背負った意味が捨象されてしまうといった問題を指摘した。このような Péroz (2010) の問題を解決するために、本発表は、隠喩的紐帯によって新たな語義を生んできた通時的連関と FS からそれぞれの用法における語義を形成する共時的連関を区別する2段階の意義形成を提案した。

[総合討議]

1. 質問：ハンドアウトには、「隠喩・成句」はいわば「第2度の使用である」(emplois du deuxième degré)、「隠喩的紐帯によってあらたな語義を生んできた通時的連関」と示されているが、このような通時的なものを構築主義意味論の「言語表現を主体による操作の痕跡としてとらえる」といったことに取り込むとはどのようなことなのか。歴史的なことに今の人間が介入できるということなのか。

回答：構築主義意味論は発話言語学の中での意味論の枠組みであるが、この発話言語学における「操作」とは、一般に考えられる話者の意図は問題にせず、形式の振る舞いから言語現象がいかに再構築できるかを扱う。したがって、「第2度の使用」の「使用」、「通時的連関」の「連関」が人間の介入を示すわけではない。

2. 質問：指示主義意味論に対する批判は早い段階の Chomsky を初めとし、80年代、90年代からあった。例えば、慶応大学の西山祐司氏は、言語における意味論は人の頭の中にある文法の何かしらの意味いわゆる内在主義的意味論であるのに対し、従来の指示主義意味論は外在主義的意味論であるとしている。今回発表されたフランス語学内の構築主義意味論と一般言語学において議論されている内在主義的意味論の間の類似点・相違点を示してもらえだろうか。

回答：確かに両者の間には関連がありそうではあるが、その詳細については今後の課題としておきたい。

3. コメント：構築主義意味論は時枝誠記の言語過程説を想起させるが、この点についてどう考えるか。

回答：（宮腰）実は、Culioli の発話言語学と時枝誠記の言語学には繋がりが多いのではないかと思ってきた。（渡邊）Culioli が 1990 年代に来日した折、時枝誠記の流れをくむ国語学者渡辺実氏と意気投合したと聞いている。

3. 研究発表と総合討議

今回の統一テーマの発表は 4 件と数は少なかったものの、以上の発表要旨と質疑応答・コメントからも分かるように、その内容は大変充実したものであった。(1) 蔦原の *de manera/forma/modo* の定型性を扱った発表は、どのような語連結が定型表現と見なされ、どのような語連結が自由連結と見なされるかを決める際には当該名詞の意味の希薄化（脱意味化）が問題になるが、その解明には当該名詞と共起する語の特徴に注目する必要があることが示された。また、(2) 森のフランス語半過去の語調緩和に関する発表、(3) 川瀬のルーマニア語とフランス語の時制の一致に関する発表は、意味論の中心テーマのひとつともいえる時制を扱ったものであった。さらに、(4) 渡邊・宮腰の構築主義意味論の発表は、従来の指示主義・認知主義意味論に対する発話言語学の側からの新たな意味論の枠組みの提示であり大変挑戦的なものであった。このように今回の発表は、統一テーマ「ロマンス諸語の意味論」がいかに多様な観点から論じることができるかを示したもので、今後の展開が大いに期待されるものであった。